
とある戦士の風林火山

Y S - 8 6

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある戦士の風林火山

【Nコード】

N1229Y

【作者名】

YS - 86

【あらすじ】

四千年の長きに渡り、繰り返された聖剣戦争が遂に終結した。小次郎は十本の聖剣を総て消滅させる決意をし、それを実行する。その時、起こった衝撃波で彼は世界から消滅してしまう。次に彼が目覚めた時、目の前に広がっていたのは、科学の街・学園都市だった！新たな世界を舞台に風の戦士の新たな闘いが、今、始まる！！

*この作品は車田正美先生の代表作の一つ「風魔の小次郎」と鎌池和馬先生の代表作「とある魔術の禁書目録」のクロスオーバーとな

ります。

ブログ（前書き）

はじめまして！YS - 86と申します。此度は私めのような駄文にお付き合い頂き誠にありがとうございます。さて、この作品は二次創作であり、クロスオーバー作品であります。そういうものが苦手な方は問答無用でブラウザバックでお戻り頂いて構いません。尚この作品のメイン主人公の小次郎君の服装に若干の変化があります。そのことについては平にご了承くださると助かります。では、ブログが始まります。

プロローグ

天は燃え、地はひび割れ

、その天と地交わるころ、果てしなき遠い彼方

―この大いなる聖地で、

四千年間闘いは続けられていた。しかし、それも今終わろうとしていた。

―既に八人もの戦士が己の聖剣のみを残して…闘いの果てに消えていた。

何もない空間から1人の

少年が突如現れた。赤いシャツの上に学ランを羽織った活発そうな少年である。

「か…^{カオス}華悪崇…お前もこの戦場に舞い戻ったはずだ！出てこい華悪崇よ！

！」

少年が叫ぶと紅い衣を纏った男が姿を現した。

「小次郎…」

「華悪崇！」

「わ…私たちはどうやら

…同じものを見てきたらしいな…」

「死界の入口ってやつか…」「し…しかし何故急にこの戦場へ戻ったのか……………」

「風林火山が時の流れを

逆に変えたのよ！」

少年のその言葉に男は驚愕した。

「な…なにに、まさか…」

「あのまま 逝っちまったら、また、いつの日か俺達は闘わなければならねえ運命だ。そんなこたアもつ、ごめんだからな！」

叫んだ後、少年―小次郎は飛び上がり、攻撃態勢へと移った。

「聖剣戦争をこれで終わりにする為に華悪崇、死界には、おめえ1人で逝ってもらうぜー！ー」

ッ！ー！」

二つの聖剣がぶつかり合う。それから何合か打ち合う二人。やがて華悪崇が口を開く。

「バ…バカな。時の流れを変えてまで決着をつけようなどと…こ…

小次郎

お前は自分のしでかしたことが分かっているのか…」

「往生際が悪いぜ華悪崇。おとなしく死界へと…」

小次郎が聖剣・風林火山を振り上げ華悪崇の聖剣へとおもいつき叩きつける。

「消えちまえー！ー！」

その時、華悪崇の聖剣・鳳凰天舞に大きく亀裂が走った。当然彼は驚愕する。

「な…なにに！こ…こんなバカな…鳳凰天舞に亀裂が入ったー！ーッ！ー！」

その隙を小次郎が逃すはずもなく続けて聖剣を叩きつける。

「これで聖剣戦争が終わる！ー！」

「くっ！」

受け止める華悪崇。しかし、彼の聖剣には次々と新しい亀裂が走っていく。そのまま鍔迫り合いに持ち込むも最早決着がつくのも時間の問題であった。

「う…うう…よ…よせ…

よせ小次郎。こ…これ以上流れを…時の流れを変えるな…」

しかしその忠告も無視して、小次郎は次々と風林火山を鳳凰天舞へ叩きつけていく。

「聖剣戦争は今までずっと決着のつかないままきたのだ…いわばバランス・オブ・パワー…カオスとコスモの力の均衡で歴史は流れてきたのだ！ー！」

尚も風林火山を叩きつける小次郎。その目には決意の炎が宿っていた。

「何故、決着が付かなかったのか…何故、四千年も続いたのか…それはどちらか一方が勝つことによって何かが狂うのではないのか！」

その言葉の終わりと共に

小次郎は一旦距離をとる。

「何を今更つべこべ言ってるんだ華悪崇。これで、もうもう二度とオレ達は闘わずに済むんだぜ。お前が負けることによってな！」

そして、青眼に構える小次郎。

「そうよ、これで終わるのよ…気の遠くなるほど

長かったこの聖剣戦争もやっと終わるんだ…」

その姿に華悪崇は恐怖する。

「あ…ああ…風林火山の輝きが…大きさがまるで違う！や…やめろ小次郎、み…未来の…」

最後の突進をする小次郎。その姿に、その後待つ運命に恐怖する華悪崇。

「歴史を変えるな——ッ！」

叫びと共に轟音と閃光が走る。

次の瞬間に、空を舞う聖剣・鳳凰天舞。それが地面に突き刺さった時、刃先を残して崩壊していった。暫く背中合わせに対峙していた二人だったが、やがて華悪崇がその重い口を開いた。

「こ…小次郎…この闘いは、た…確かにお前の勝ちかもしれん…そ…そして、もう二度と聖剣を巡る闘いがおこることはもうないだろう…」

そう言った後、華悪崇は小次郎の方へ向き直った。

「だ…だが、お前は…お前はその手で歴史を変えてしまった………そ…それが、いったいどんなに恐ろしいことになるのかかわっているのか…」

小次郎にそう問いかけながら、華悪崇の体は光の粒子となって消滅

していく…。消滅しながらも尚、華惡崇は小次郎に話しかける。

「歴史を作るのは神だ…。そ…それを人間であるお前が変えてしまったのだ…。き…きつと…きつとお前もそのまま無事には済むまい…。お前も消される。」

神の怒りによつてな…」

その言葉と共に、華惡崇は完全に消滅した。そして、それから数秒後、小次郎はゆっくりと後ろを振り向いた。そこには、この闘いで散つていった九人の戦士の聖剣がまるで墓標のように地面に突きたった光景だった。

「神か！もし、そんなものが本当に存在するなら見ていたはずだな」
小次郎は剣の墓標を見ながら静かに呟いた。

「聖剣戦争は終わった！これで四千年続いた闘いも二度と繰り返すこともないはずだ！！」

小次郎は呟きながらも静かに聖剣―剛刀・風林火山を振り上げる。

「そして、主人を失い戦場に残った十本の…これら総ての聖剣も最早無用のもの…」

風林火山を握る手の力を更に強める。

「な…何が大地の守りだ。こんなものが…こんなものがあるから闘いが生まれ、闘いが絶えることがなかったのだ…」

小次郎は今まで自分が見てきた闘いとこれまで人類が歩んできた闘いの歴史を思い浮かべる。そして、遂にある決断を下す。それは―
「残念だが神よ！あんたの創り出した聖剣は消える！！今、この場でな！！」

自身の決意を叫びながら、小次郎は勢いよく風林火山（相棒）を振り下ろした。振り下ろされた剣から光の衝撃波が迸り、九本の聖剣を飲み込んだ。そして、衝撃波に飲み込まれた聖剣は一つ残らず崩壊・消滅していく。それは小次郎も例外ではなかった。

（き…消える…総てが…）

小次郎は光の中静かに思う。

（総てが白い光の中に飲み込まれ…や…やがて一切のものが無にな

るのか…。人も地も星も…。そ…そして、いずれは…この大宇宙さえもか…)

その思考を最後に小次郎は意識を失った。

―そんな意識を失った小次郎に語りかける存在が在った。

《小次郎…。小次郎よ…

四千年もの年月、神の正統たる戦士であつた小次郎よ…。遂に別離^{わかれ}の時がきたようです…。貴方達コスモの戦士は常に聖剣を守り通し、そして、貴方は遂に十本の聖剣を神のもとへと帰してくれました…。これで聖剣戦争もやっと終焉を迎えることができました…。神も、もう貴方達を輪廻によつて縛つたりすることはありません…。さあ、これからは貴方達の求めるところへ…自分の一番望むところへお帰りなさい…。四千年もの間ありがとう…。さようなら小次郎…。さようならコスモの戦士達…》

その言葉が終わると小次郎の身体は黄金の光に包み込まれた。光が治まった時、小次郎の姿はどこにもなかった。この世界から完全に消滅したのである…。

プロローグ（後書き）

次回、遂にとある世界にトリップします。小次郎の運命やいかに！
？

第一話 学園都市に降り立つ”風”（前書き）

この作品は、ネコさんの小説「とある伝説の赤き英雄」^{レフリロイド}にかなり影響を受けています。なので、ネコさんに参考許可を頂きました。
という訳で私の初連載 本編スタートです。

第一話 学園都市に降り立つ”風”

辺りに小鳥の鳴き声が響き渡る、どうやら、時刻は早朝のようだ……そんな穏やかな陽気とは裏腹にとある公園にて一人のボサボサ頭の……しかし、自然と一つの髪型として、定着している……少年が倒れていた。服装は赤いシャツに学ランを羽織ったちよつと変わった学生服を着た少年である。

「う……くっ！」

穏やかな朝日を浴びて少年は目を覚ましたようだ。

「こ……ここはどこだ？ 風魔の里じゃなさそうだし、白鳳学院の周辺でもねえ。一体……」

少年……小次郎は微かに痛む体を起こし、辺りを見回す。同時に耳を周囲の音を拾う為に傾ける。暫くすると、状況が少しは分かったのか、

「全く知らねえ場所っぱいな……仕方ねえ、ここは行動あるのみだぜ！」

そう言つて立ち上がる小次郎。すると――

ぐううううつ！と突然彼の腹から大きな音が出てきた。

「っと！その前に腹ごしらえだな！しかし、どうすつかねえ……。金ねえんだよね。」

途方にくれる小次郎。だが、彼はこちらに近付いてくる気配に、いや、すぐ近くを通りかかる気配に気付いていた。

「しゃあねえ。この気配のやつに相談してみるとすつか！」

言うやいなや、小次郎の姿は風と共に消えた。

……しかし、小次郎は空腹故に気付いていなかった。自分の右手が僅かに熱を持っていたことを――

ここ学園都市には窓のないビルがある。

ドアも窓も廊下も階段もない、建物として機能しないビル。

レベル4の一つである空間移動テレポートを使わない限りは出入りも出来ない密室の中心に、巨大なガラスの円筒器は鎮座していた。

直径四メートル、全長十メートルを超す強化ガラスの円筒の中には赤い液体が満たされている。広大な部屋の四方の壁は全て機械類で埋め尽くされ、そこから伸びる数十万ものコードやチューブが床を這い、中央の円筒に接続されていた。

窓のないその部屋はいつも闇に包まれていた。ただし、円筒を遠巻きに取り囲む機械類のランプやモニタの光が、まるで夜空の星々のように瞬いている。

赤い液体に満たされた円筒の中には、緑色の手術衣を着た人間が逆さで浮かんでいた。

学園都市統括理事長、《人間》アレイスター。

それは男にも女にも、大人にも子供にも、聖人にも囚人にも見える。その《人間》は自分の生命活動を全て機械に預けることで、計算上ではおよそ千七百年もの寿命を手に入れていた。脳を含め全身はほぼ仮死状態に近く、思考の大半も機械によって補助している。

(……、さて。そろそろか)

アレイスターがそう思った瞬間、タイミングを合わせたように円筒の正面に、唐突に二つの人影が現れた。一人は小柄の空間移動能力者の少女、そしてもう一人は彼女にエスコートされるように手を繋いだ大男だ。空間移動能力者は一言も発しないまま会釈すると、再び虚空へと消える。

闇の中には大男だけが取り残された。

その大男は短い金髪をツンツンに尖らせ、青いサングラスで目線を隠した少年だった。アロハシャツにハーフパンツという、こんな場所にはそぐわない格好をしている。

土御門元春。イギリス清教の情報をリークする学園都市の手駒だ。

「警備が甘すぎるぞ。遊んでいるのか」

スパイである土御門は、

雇い主であるアレイスターに向かって苛立った口調で言った。スパイであるものの、彼はアレイスターの従属的な部下ではないのだ。土御門の口調は突き放すような響きがあり、普段の彼を知るものなら驚きに身をすくめていただろう。自分の不満を隠そうとしない土御門に、アレイスターは淡く淡く笑って、

「構わぬよ。侵入者の所在はこちらでも追跡している。これを使わぬ手はない。若干ルートを変更するだけで、プラン二。八二から二三七七までを短縮も出来ー」

「言っておくが」

土御門は遮るように言った。バン、と手の中のレポートをガラスの円筒へ押し付ける。クリップで留められた隠し撮りの写真には、侵入者の顔が写っている。

年は二十代も後半で、金色の髪と、別の国の血を引いた褐色の肌が特徴的な女だ。ただし髪の手入れを怠っているのか安っぽい演劇用のカツラのようにあちこちの毛が荒れて飛び跳ねている。後ろ姿を見るとライオンみたいなシルエットの女だ。

服装は漆黒のドレスの端々に白いレースをあしらった、ゴシックロリータ。ただしドレスの生地は擦り切れ、レースも解れてくすんだ色を見せている。飾りではなく、日常的に豪華な衣装を身に纏っている証拠だ。

「シェリー・クロムウエル。こいつは流れの魔術師ではなく、イギリス清教《必要悪の教会》^{ネセサリーウス}の人間だ。

アウレオールの時のようにはいかないぞ」

土御門はまるで無理な禁煙でもしているような苛立った様子で、「イギリス清教だって人の作る組織である以上は一枚岩ではない。

いや、構成の特性上、十字教の中でもあれほど複雑に分岐した国教は他にはない。お前とて分かっているだろうが」

「隣人を愛する者同士が互いにいがみ合うとは、随分とすてきな職場だな」

「全くだ」土御門は息を吐いて、「しかし、それ故にイギリス清教にも様々な派閥と考え方がある。学園都市協力派だけとは限らないぞ。中には全世界を英国の殖民地にして全ての国旗のデザインを一つに統一したいと考えるヤツまでいる始末だ。お前がウチのお姫様と結んだ《協定》にしても、どこまで役に立つかは分らん」

イギリス清教と学園都市のトップ同士が決めた《協定》さえ疑問視する者もいる。知識の宝庫たるインデックスが学園都市内部にいる事が、既に情報漏洩の危険を孕むに違いないと。もちろん、《必要悪の協会》とは別枠の《騎士団》達が実際にインデックスのセキュリティが外れていることまでは掴んではないとは思うのだが。

それにしても、今の段階でさえ《騎士団》の中でも十字軍時代の侵略精神をそのまま引き継いでいる派閥などは学園都市を危険視している。土御門が上手く情報操作しなければ学園都市討伐運動が起きかねないほどに。

「オレも教会に潜れば在る程度の人心を操作することも出来る。だがな、それにも限度つてがあるんだ。派閥や勢力が異なる所までは手を伸ばせない。伸ばしたとしても、どこかでこちらが意図的に操作した情報は歪曲してしまう」

彼は一度そこで言葉を区切ってから、

「大体、アウレオルスの時でさえ散々あちこちに手を回していただろうが。魔術師は同じ魔術師が裁かなければならない。この法則はオレよりもお前の方が分かっているはずだ。学園都市は《科学》を、教会は《神秘》を、それぞれの技術を独占することでアドバンテージが生まれている。その中で学園都市の面子が魔術師を潰してみろ。せっかく死守してきた門外不出の独占技術がそこから漏れるかもしれないと思われただけで立派な亀裂の出来上がりだ」

上条当麻という少年は、この一ヶ月強で何人かの魔術師と戦ってきた。しかし、ステイルや神裂は教会と事前の取引があったし、アウレオルスや閻咲などは教会所属ではない流れの魔術師なので、それほど波風は立たなかった。

だが今回は意味の重さが違う。学園都市に侵入してきたのは《イギリス清教独自の術式》を抱えた魔術師で、しかも取引もない。これが一派閥の意向なのかシェリー一人の判断できないが、仮に彼女の独断だとしても、勝手に倒すのはまずい。

シェリー「クロムウエルは王立芸術院でも最も寓意画の組み立てと解読に優れた人間だ。寓意画とは絵画の中に魔導書の内容を隠した暗号絵画の事で、例えば洋上に浮かぶ船の上から見た、夕暮れに水平線へ沈んでいく太陽の絵画があったとする。普通の人が見れば何気ない一枚の風景画に過ぎないが、この中の海水は《塩》を、太陽は《黄金》を意味し、これらを組み合わせると《黄金と塩を使えば、海の中を魚のように泳ぐことが出来る魔術の方法を示している》という情報を取り出せる。

他にも絵の具のカラーや厚み、夕暮れという時間帯、船の上という場所……絵画の中にある些細な要素の全てが何らかの意味を持つ暗号として機能するので、何百年も経ってから寓意画の読解に誤りがあったと判明するパターンも多い。真の意味で寓意画のスペシャリストになるのは、それぐらい難しいのだ。

インデックスが知識の収集・保管を担当するなら、シェリーは暗号技術を封印・開封する専門家である。彼女が他勢力の手に落ちれば、イギリス清教が守り続けてきた複雑怪奇な暗号の解読方法が丸ごと相手側に伝わってしまう事になる。下手にシェリーを倒せばイギリス清教と学園都市の間に亀裂が走る。シェリーを送り込んだ派閥が学園都市を嫌っているのだとすれば、そこを狙って亀裂を押し広げようとするだろう。

だが、土御門はその先を敢えて言葉には出さない。というよりも、出せない。その一文は口に出すのも躊躇われ、胸の中に広がっていく。

「最悪、科学世界と教会世界の戦争となるかもしれない。

土御門はアレイスターを睨みながら、

「まあ、今回の件でもよほど間抜けな選択をしない限り、この火種

が燃え上がることはないだろう。だが、火種を消す為に水面下で人死にが起きるかもしれない。お前は何を考えている？本腰を入れて警備に力を入れれば、いくらでも侵入を阻止できた癖に」舌打ちして、「とにかく、オレはシェリーを討つぞ。魔術師の手で魔術師を討てば、少しは波も小さくなる。それからスパイはこれで廃業だ。ここまで派手に動けば必ず目をつけられるからな。まったく、心理的な死角に潜ってこそそのスパイだというのに、四六時中監視されて仕事かー」

「君は手を出さなくて良い」

遮るようなアレイスターの一言に、土御門は一瞬凍りついた。

何を言っているのか、理解できなかった。

「君は手を出さなくても良いと告げた」

「……本気で言っているのか？」

土御門は、相手の正気を疑うように言った。

「可能性は、決してゼロではないんだぞ。水面下での工作戦なんてビルからビルへ綱渡りするようなものだ、手を間違えれば戦争が起きるかもしれないというのに！」

大量破壊兵器の設計図が他国に漏れれば、それだけで戦争の火種として正当化される。学園都市内で教会の魔術師をほくするとは、つまりはそういう意味なのだ。

確かに余程のことがない限り、全面戦争にはならないだろう。しかし、逆に言えば余程の事があれば戦争が起きてしまうのだ。それも国家と国家の戦争ではない、国教の壁すらも越えた《科学》と《教会》、二つの世界の大戦なのだ。

学園都市を代表する《科学》と教会を代表する《オカルト》の間に圧倒的な戦力差はない。それはつまり、実際に戦争が起きれば泥沼のように長引いてしまうのだ。

「アレイスター、お前は何を考えている？上条当麻に魔術師をぶつけるのがそんなに魅力的か。あの右手は確かに魔術に対するジョーカーだが、それでもアレだけで教会全体の崩壊など出来るはずもな

いだろう！」

「プラン二。八二から二三七七までを短縮できる。理由はそれだけだが？」

アレイスターの言葉に、土御門の息が詰まる。

プラン。「計画」というより「手順」といった所か。アレイスターがこの単語を口にする場合、該当するものは一つしかない。

「虚数学区・五行機関の制御法か」土御門は忌々しげに呟いた。虚数学区・五行機関。学園都市ができた当初の《始まりの研究所》と呼ばれているが、今はどこにあるのか、本当にあるのかも分からないと言われる幻のような存在。ウワサでは現在の工学でも再現不可能な《架空技術》を抱え、また学園都市の裏側からその全権を掌握していると考えられている。

「外」の教会や魔術師はこのビルを指していると思っているようだが、違う。実際はそんなものではないし、本当の事を「外」に教える訳にもいかない。

言えるはずがない。学園都市に対して絶大な影響力を持つ「ソレ」が、誰にも制御できず何のためにあるのかも分からないまま潜んでいるなどと。

学園都市を治めるアレイスターとしてはあらゆるものを利用してでも五行機関の御し方を掴まなければならない。いや、アレイスターはおそらく御し方自体は既に掴んでいる。ただし、ソレを実行するための材料が、キーが足りないのだ。

「手順」というのは一方通行が行った絶対能力進化（レベル6シフト）実験を思い浮かべると分かりやすい。あれと同じく、一定の順序で事件・問題を起こしてキーを作り上げていく。

その「手順」の中心には一人の少年がいる。

上条当麻。

アレイスターは当初から彼をプロセスに取り組むつもりだったが、禁書目録や錬金術師などの魔術戦まで考慮していたとは思えないと土御門は睨んでいる。アレイスターはこうしたイレギュラーが起き

る度に「計画」を組み替え、誤差を修正するどころか逆に利用して膨大な「手順」を少しでも短縮しようとしているのだ。

今回のシェリー・クロムウェルもそういう事か。

ここで手を出さなくても、いずれ「手順」^{プラン}は終わるはずなのに。

「その程度の、為に？」

「この街の軍事力や影響力を考えれば、その程度などとは呼べないはずだがな。何せ世界を引き裂く程の暴れ馬だ、手綱は出来るだけ早くつかみ尚した方が無難だろう」

アレイスターは淡く笑う。そこからはいかなる感情も掴めない。喜ぶようにも嘲るようにも哀れむようにも楽しむようにも見えてしまう。喜怒哀楽の全てが混線している。

なんてふざけた話だ、と土御門は舌打ちした。できるならアレイスターの命令など無視して独断でシェリーを討ちたい所だが、それも叶わない。

そもそも、彼一人ではこのビルから出る事も出来ない。出口がないのだ。

ドアも窓も廊下も階段もない、生活に必要な大気すら施設内で生成しているため通気口もない。それでいてこのビルは、火力だけなら核ミサイルの爆風を受けても倒れないほどの強度を誇る。

状況としては銀行の大金庫や核シェルターに監禁される事よりもタチが悪い。絶望度で言えば宇宙服のない状態で大気圏外を飛ぶスペースシャトルに閉じ込められるのと同じくらいか。

「外と連絡がつくはずもない、か。おいアレイスター、お前の有線で外の空間移動能力者を呼び出せ。さもないとそこらに伸びているコードを片っ端から引き抜くぞ」

「構わんよ。ストレスを解消したいのなら好きなだけやるといい」土御門は苦虫を噛み潰したような顔をした。薄々勘付いてはいたが、この部屋にあるチューブやコード、機械類はダミーなのだろう。大体、この部屋だけでアレイスターの生命維持を賄えるなら、そもそもこんな巨大なビルを用意する必要もない。この円筒器もただのハ

ツタリで、ひよつとしたら立体映像を映すための装置なのかもしれない。

アレイスターの浮かぶ円筒器に背を預け、口を開こうとした時、不意にアレイスターが声を掛けてきた。

「ところで、君はもう一人、実に妙な侵入者がいることを知っているかい？」

「何……？上条当麻ではないのか？」

「違う。彼ではない」

土御門はアレイスターの言っていることの意味が理解できなかった。何故ならば、今朝、侵入してきた者は、シェリーと上条当麻の二人だけのはずだからだ。

「これを見たまえ」

土御門の目の前に出された映像には、年齢が十五歳ほどの、やや逆立ったボサボサした茶色い髪をしたちよつと変わった学生服をラフに着た少年だった。その顔から少々空腹のようだと分かる。そして、どことなく活発そうな印象を受ける、そんな少年だった。

「こいつは？」

「分からない。急に街の中にある公園に出現した」

「何だと！？どういう事だ、何故報告がない！？」

「このことはまだ誰にも伝えてはいない。だが、彼は魔術師でも能力者でもない。そうだろう？」確かに映像に映る少年は魔術師には見えない。しかし、この少年は不思議な事に突然街に現れたと言うのだ。このことには、流石の土御門にさえ訳が分からなかった。と、様々な疑問が浮かぶ土御門の前で突然、件の少年が風と共に消えた。

「なっ！？」

その光景に驚く土御門。その顔には驚愕の色がただただ浮かんでいた。

一方、土御門と同じようにその光景を眺めていたアレイスターは笑っていた。彼自身、分からないといったにも関わらず…。

（彼は……もしかしたら……）

それはまるで、新しい玩具を得た子供のように。そして、それは幻想殺し・一方通行に続く第三の鍵を見つけた者の目でもあった。

「あゝ…なんかもう、不幸だ…」

何だかぐったりとした顔をしたツンツン頭の少年が歩いていた。彼はとある理由で、つい先程まで警備員アンチスキルに追いかけられていたのである。

「はあ…」

公園の近くに立ち止まり思いつきり溜息をつく少年―上条当麻。その時、不意に妙な、しかし、心地よい風が吹くのを感じた。

「な…なんだあ!？」

当麻が風の吹いた方を向くと、そこにはやや逆立ったボサボサした頭のちよつと変わった学生服をラフに着込んだ少年がいた。

その少年は当麻の事を見ると、につ、不敵に笑った。その様子に当麻はいやな予感がした。

（な、なんでせうか。この感じは!？なんか帰って早々カツアゲにあっちゃいそうな感じがするんですが!？……ふ、不幸だ…）

そう思った当麻はちよつと身構える。そんな当麻に構わずゆっくり近付いていく少年。

そして、当麻のすぐ近くに（いつでも殴りかけられるくらいの距離だ）着くと、少年はその口を漸く開いた。

「おい、お前……ちよつくら相談したいことがあるんだけどよ…」

「は、はい……な、なんでせうか？」

続く言葉に警戒する当麻。しかし、その次に出てきた言葉と態度に思わず硬直してしまうことになる。

「頼む！三百円でいいんだ。俺に恵んでくれ!!」

「……はあ!？」

突然少年がまるで当麻を拝むかのように手を合わせながら、ぺこりと頭を下げている。これがカツアゲだとすれば随分腰の低いカツアゲである。

この少年の思わぬ低姿勢な態度に当麻は先程まで抱いていた警戒心を霧散させた。

「え……えくと、一応聞くけど……何で？」

その言葉に少年は顔を上げて口を開け答えようとした時――
ぐうぐうぐうぐうっ！

と盛大な音が少年の腹から聞こえた。

「……………」

「……………」

暫く沈黙する二人。その沈黙の後、先に口を開いたのは当麻だった。

「え」と、腹が減ってるのか？」

「や、やつぱ分かつちまうか？」

「ま、まああんだけ盛大な腹の音を聞けばな……」

「じゃ、じゃあ……………」

「ああ、三百円くらいやるよ。ほれ！」

当麻は百円玉を三枚、財布から取り出すと、少年に手渡した。

「サンキュー！恩に着るぜ！この恩は後で必ず返すからよ！」

「恩って……んな大げさな……。まあそんなのはいいから、早くコンビニ行つて食べ物を買つてこいよ」

「おうっ。んじゃな！」

「ああ！……あつ、ソレ別に返さなくていいかなー！」

別れの挨拶を交わし、別れようとした時、当麻は慌てて後ろを振り返り、お金を返さなくてもいい旨を少年に伝えたが、当麻が少年にそう言った時、既にその少年は既に遠くを走っていた。

（……変なヤツだったけど、悪い奴じゃないっぽいな。しかし、なんかいいことをしたなあ……）

当麻は素直にそう思い、その場を後にし、家路へとついた。

この時の当麻は思いもしなかった。あの少年が自分にとって最も頼りになる戦友になることを……

寮への道すがら悶々と昨夜から今朝までのことを思い出していた当麻は、漸く自宅のある学生寮の近くまで辿り着いた。

（……あ。やっと学生寮が見えてきた。うおー、漸く日常空間に帰ってこれたー）

実際には寮を出て一日も経っていないのだが、当麻には数ヶ月ぶりの我が家のように感じられた。もともと、彼は記憶喪失で八月以前の記憶がない為、数ヶ月ぶり、というものがどんな感覚なのかを知らないのだが。

上条は疲労と睡眠不足でフラフラになった体を引きずるように学生寮の建物に入り、狭いエレベーターを経由して自分の部屋まで辿り着いた。

（うっ……ねむい）

当麻は思わず欠伸を噛み殺す。本音を言えばベッドに飛び込んで二、三日は眠りこけていたのだが、今日は九月一日、始業式である。夏休みに記憶を失った当麻にとっては、一部の人間を除けばクラスメイトとほぼ面識がない状態なのだ。他の生徒にとっては何気ない一日だろうが、当麻にとっては今の状況は転校初日に似ている。眠いという理由で初日からサボりを決める転入生というのもどうかと思う。

（記憶をなくしてるってのは……やっぱ誰にも知られたくねえからなあ。今日は授業もないだろうし、一日使って学校生活のリズムと自分の人間関係^{ホシシヨン}を覚えねえと）

割と苦労人な当麻は眠気の混じった溜息をつきつつ、玄関のドアを

開けた。

瞬間、部屋の奥から少女の甲高い叫び声が飛んでくる。

「と・う・まゝッ!!」

その声は怒りを含んだものだったが、それだけだった。その少女は玄関にいる当麻の元へと駆け寄ってくることはない。

当麻は一瞬だけ怪訝そうな顔をしたが……やがて思い出した。

彼が眠たい頭を働かせていると、漸く声の主の少女が部屋の奥から現れた。腰まである銀の髪と白い肌を持つ外国人の少女だ。着ている衣服は純白の布地に金糸の刺繍をあしらった豪華な服で、何故か服の縫い目に沿って無数の安全ピンが刺してある。

まだ子供らしさが残る少女の名はインデックス。

……なのだが、今の彼女は体中を細いロープで雁字搦めに縛られていた。手足をまともに動かせないインデックスは、尺取虫みたいな動きで部屋の奥から這ってきたのだ。ちなみに、彼女の頭の上には三毛猫が器用に座っていて、のんびりと欠伸をしていた。感覚的には《下克上》という言葉がイヤに似合う。

「うわっ、すっかり忘れてた！お前ずつとそのままだったのか!？」

「とうま！人を置き去りにしておいて最初に出てくる台詞がそれなの!？」

インデックスは犬歯を剥き出しにして叫ぶ。

実は昨夜当麻は闇咲逢魔やみさか おうまという男と出会い、彼の知り合いを助けるために一戦交えている。当然ながらそんな所へか弱いインデックスを連れて行くわけにもいかなかったのだが、そう説明した瞬間に彼女が叩く蹴る噛み付くと大暴れを始めたため、やむなく縄縛術じゆばくじゆとかいう縄スキルを持つ闇咲に彼女を縛ってもらい、インデックスにはお留守番してもらうしかなかったのだ。

「また今回も今回も今回も一人で突っ走って……。とうま、とにかくこのロープを解きなさい！注連縄しめなわを使った小型結界でも、とうまの右手なら触っただけで壊せるはずだもん!」

そこには幻想殺し（イメージブレイカー）という力が宿っている。それが異能の力による者ならば、魔術だろうが超能力だろうが問答無用で無効化させるものだ。ただし、その力は右手の手首から先しか適用されない、という欠点もある訳だが。

「けど、なあ。このロープ、解いたら解いたでお前ものすごく暴れそうだし」

インデックスは怒ると人の頭に噛み付くということんでもない悪癖がある。今の怒髪天モードの彼女の戒めを解くというのは、言ってしまえばお腹を空かせた猛犬の首輪を外して野に放つようなものだ。当麻としては、新学期早々、体に女の子の歯型をつけて登校するなんて事はしたくないのだが……。

と、インデックスの表情が柔らかく変化した。

分かりやすく言うと、迷子になって怯える子供に接するような感じで。

「とうま。今なら私は怒らないから、素直にロープを解いてもらん？」

「……ホントに？ホントに怒らない？」

「怒らないよ」

「ロープを解いた瞬間にガブガブ噛み付いてきたりしない？」

「しないしない」

インデックスはにっこりと、聖母のような柔らかい笑みを浮かべて言う。

当麻は屈み込んで、床の上に転がっているインデックスの体を縛り付けているロープを、右人差し指で軽くつついた。するとまるで手品のように、インデックスの全身を縛っていたロープの数十もの結び目が、一斉にすりと解けた。

次の瞬間、拘束から解放されたインデックスは迷わず当麻へと襲いかかる。

「ひい！？」

原始人が巨大な肉にかぶりつくように、彼女は当麻の頭にかじりつ

く。

「とうまのとうまのばかばかばか!!」

「ぎゃああ!？」当麻は叫んだがもう遅く、彼は激痛にびくんびくんと跳ね回る。あらゆる異能も打ち消せる右手の幻想殺しも猛獣少女インデックスには何の効果もない。

「う、うそつき!怒らないつつたのに痛あ!？」

「怒るに決まってるんだよ!まったく、魔術師と戦うって分かっているのに私を置いていくなんて!どれだけ不思議な力を持っていたって、とうまは魔術の素人なんだから!何かあったらどうするつもりだったの!？」

見れば、間近にある彼女の顔は大層怒っていたが、その目だけは泣きそうになっていた。

インデックスは思い出の品を抱き締めるように、当麻の頭に手を回す。

「……本当にどうするつもりだったの？」

抱き締められた当麻は、頭の上から降りかかるその声を聞いた。

その長い銀髪から、ほのかに甘い匂いが漂ってきた。

少女の体は、わずかに震えてさえた。

きっと、彼女は当麻が帰ってくるまで、一晚心配し続けていたのだろう。

「ごめん」

当麻は、それだけ言った。

それしか、言葉が出なかった。

ここまで自分の身を気にかけてくれた人に、これ以上不安がらせる訳にはいかないな、と当麻は考えた。素直に、本当に素直に、当麻はインデックスを傷つけないと、心の底から願うことが出来た。そのため、当麻はインデックスに自分が記憶喪失であることを話していない。話せばやっぱり彼女を傷つけてしまうだろうから。

当麻は眠気をこらえて二人分の朝食を作る。時間がないため軽めのヤツだ。

料理が出来た後、すぐに食卓についたインデックスと三毛猫に対し、当麻はトーストをくわえたまま部屋のあちこちを歩いて、始業式に必要な物を

準備していく。「……っと、上履きだろ、筆記用具に……宿題の提出日って、今日……だよな。やっぱり今日なんだよなあ。くそ、結局終わんなかったしどうしよう……？……あとは、通信簿？こんなメールで送ってくれりゃ良いのに」

あるいはハッキング体策なのかも、とか適当に考えながら、当麻は通信簿を鞆に投げ込んだ。

と、テーブルに一人残されたインデックスは不満そうな目を当麻へと向けて、

「とうま。ホントにガッコー行っちゃうの？」

「んー？」

当麻は荷物を詰め込んだ鞆を適当な場所に置くと、残りの朝食を一気に食べて、自分の食器を流し台へ持って行った。

「あーそっか。新学期始まると、お前ずっと留守番になっちゃうのか」

「む。と、とうま。私は別に寂しいとか一人が嫌だとか、そういう事言っているんじゃないんだよ？」

むしろ彼女を一人にしておくと思っっている当麻。だが、余計な口出しはやめておいた。

それには色々な事情があるが、ここでは敢えて割愛する。

「その辺も考えなくっちゃなー。悪いインデックス、今日は取り敢えず留守番頼むわ。食器は流しの中で水に漬けといて」

当麻は時計を見ながら、急いだ調子で言った。

ある事情で半分寝室と化しているユニットバスへ入り、顔を洗って歯を磨いて、夏用制服へと着替える。本音を言えば、シャワーを浴

びたいが、時間がない。支度を取り敢えず済ました当麻がユニットバスのドアを開けると、インデックスがドアの前で待っていた。彼女は何か言いたそうな表情をしていた。

「とうま、早く帰ってくる？」

「そうだな、分かった。帰ったら一緒にどこか遊びに行くか」

当麻の言葉に、インデックスはとても素直な笑みを浮かべた。

当麻としてはその顔を見るのが嬉しかったが、同時に複雑な気分になる。当麻はインデックスには、自分を経由しない人間関係を作って欲しいと思っているのだ。

「じゃ、行ってくる」

結局、何もできない当麻は、問題を保留にした。

「うん、行つてらっしゃい」

そんな当麻に、インデックスは笑みを浮かべてそう言った。

当麻が部屋を出て、五分でインデックスは退屈になっていた。

暇を潰すため暫く色々な事を考えゴロゴロしていた彼女だったが、やがて、（彼女にとって）重大な事を思い出し、その動きをピタリと止めた。

「……、あれ？とうま、お昼ご飯は？」

呟いてから、インデックスの顔がちよつと青ざめた。

現在、この部屋には食糧というモノは皆無だ。

「ど、どうしよう。未曾有の大ピンチかも」

思わず呟いてから、彼女は玄関へと視線を投げた。

薄いドアの向こうには、上条当麻のいる外の世界が広がっている。

一方その頃、当麻は学校へ向かうため、朝の大通りを走っていた。都会のいたずらカラスが線路上に小石を置いた、という本当にどうしようもない理由で電車が止まっていたのだ。

当麻の学校では電車通学を校則で禁止している。

その代わり、料金が馬鹿高いスクールバスを推奨している。が、万年金欠学生の当麻にその代金を払い続けることなぞ出来ないので、内緒で電車を使っていたのだ。

そのため、遅延証明書を学校へ持って行っても遅刻は取り消されない。

（ちつくしよ……眠いのに、疲れてんのに、朝っぱらからついてねえ。いや、今回は俺だけがついてないって訳じゃないか。分かったところで、ちつともさっぱり嬉しくねえけど）

ぼんやりした頭でそんな事を考えていた当麻だったが、不意に後ろから、何者かに物凄い速度で追い抜かれた。

茶色い髪を肩まで伸ばした、中学生くらいの少女だ。半袖のブラウスにサマーセーター、灰色のプリーツスカートというその姿は名門と呼ばれる常盤台中学のものだったが、舞い上がるスカートの端も気にせず下には短パンを穿いてますと言わんばかりの全力疾走っぷりは、完全にお嬢様のイメージからかけ離れてしまっている。

「……あー、なんだ。ビリビリか」

寝不足で回転の悪い当麻の頭が漸く答えを導き出す。

当麻は走りながら、眠くてシヨボシヨボした目を瞬かせ、

「おっすー。若者は朝っぱらから元気だなあオイ」彼の声を聞いたビリビリこと御坂美琴は、不承不承という感じで走る速度を落として当麻と並行すると、ただいま不機嫌ですという顔を向けてきた。

美琴はジト目で隣の当麻を睨みつつ、

「ってか、どうしてそんな気安く話しかけられんのかしら。昨日の夜は人をさんざんさんざんさんざんスルーしていったってのに！ちよつとは引け目とか感じないの！？」

当麻は寝ぼけ眼を擦りながら、美琴の言葉を頭の中をぐるぐる回す。そういえば確か昨夜インデックスを闇咲にさらわれた時に美琴とも会っていたような気もしたが、場合が場合だったので放ったらかしにしていた気がする。

彼らは結構な早さで朝の道を走りつつ、

「あれ、何だよ。ひょっとしてお前なんか用事でもあったのか？」

「べつ、別に。そう言う用があった訳じゃないけど……」

「????」当麻は眠たい目をぱちくりと瞬かせ、「あの、一個聞きたいんだけど。用もないのに何で俺を呼び止める必要があったんだ？」

「う、うるさいわね！別に何でもないわよ！もういい、話題を変える！アンタ普段ってこっちの道だったけ！？」

自分で話題を変えろとか宣言するなよ、と当麻は心中そう思ったが、口には出さなかった。

「……いいや。電車が止まっちゃまってから、そのせい。ま、つつても二駅分だから橋りやあなんとかなるレベルなんだけどな」

「そう言えば、さつきから随分とテンション低いわね。朝弱いのか？隣を走る美琴はキョトンとした顔をしていたが、当麻はうんざりした視線を向けて、

「昨日いろいろあったから疲れてんの。つか、むしろお前は何かって疲れが綺麗サッパリなくなってたんだ。何だよ、これが若さか、若さの力か」

昨日、八月三十一日には美琴もちよつとしたトラブルに巻き込まれている。もっとも、被害を受けたのは、そのとばっちりを食った当麻なのだが……。

「な、何よ。昨日の、こ、恋人ごっこって、そんなに疲れる仕事だった訳？」

「あん？それ一つじゃないんだけどな。他にも昨日は色々あったんでございますよ」

そっか、と美琴は小さく息を吐いた。

彼女としては、また自分が何かとんでもない迷惑を背負わせたんじゃないか、という疑念を振り払って安堵しかけていたのだが、

「ん？他にも？……アンタ、まさか他の子とも似たような事してた訳？」

「アホか。あんなこつ恥ずかしいコト平然と頼んでくるヤツなんてお前しかいねーよ」

「な……っ!?」

寝不足で平淡になっっている当麻の声に、美琴の顔が瞬時に真っ赤に染まる。

「へ、平然って、そんな訳ないでしょ！わ、わたつ、私だってメチャメチャ悩んでそれでも他に打開策がなくて仕方なくて恥を忍んで頼み込んだって言うのに!!」

「……あーはいはい。そつすねそうだねその通りですねー」

「ちよつと、真面目に聞きなさい！こら、ローテンションのままスルーしてんじゃないわよアンタ！」

そんなこんなで、テンションの落差の激しい二人は騒ぎながら学校への道を走っていく。

当麻と美琴の二人が痴話喧嘩(?)をしながら走っている時、とある公園(美琴がいつも自販機に蹴りをぶち込む公園)に当麻に恵んでもらったお金で食べ物を買った小次郎がいた。

彼は少し後悔していた。何故なら、

(あゝ、ちくしょう！！ジューズ買う分のお金を考えてなかった！)そう、三百円では食糧は買えても、飲み物を買える分はなかったのである。

左手に持っているビニール袋には、あの後コンビニで買った鮭オニギリとあんパンだけが入っていた。いくら安くても、流石に飲み物を買う分のお金はなかった。

(参ったなゝ、また恵んでもらいに行くのは悪いし、公園の水を飲むってのもなあゝ)

すこぶるどうでもいいことで悩む小次郎。この辺りはあの不幸な少

年と似ている部分がある。

そんな風に悩む小次郎の目に金食い虫（自販機）が映る。

（……ホントはこういうこたアしたくねえんだけど背に腹は変えられねえか……）

何かを決断したのか自販機に向かって構える。そして、

「うおりゃあああああ！」それはそれは見事な右フックだった。この場に学生が十人いれば全員がそう答えるであろう右フックを小次郎は放った。

「ごおん！」という轟音が響く。すると、ガコンという音と共に缶ジュースが一本出てきた。

ジュースの銘柄は抹茶ミルクだった……。

それを無言で眺める小次郎だったが、

「まあ、普通に販売してんだから飲めないこともねえか」そう言つて、自販機から出てきた缶を取り出し、小次郎は近くのベンチに座り、ちよつと遅い朝食をとる。

数分後、食事を終えた小次郎（抹茶ミルクの味は微妙だと感じた）は、図書館の位置を確かめるため公園に設置してあるタッチパネル式の地図を見ていた。

何故、図書館かというと、そこにあるパソコンで、ここが一体日本の何処なのかを調査するためである。

「うしっ！じゃあ行くか！！」

図書館の場所の確認を終えた小次郎は気合を入れると風と共に消えた。

まるで、最初からその場にいなかったかのように。

この日、学園都市に一人の”風”が現れた。

この世界の住人は知らなかった。
その”風”の少年が、

その脚は一日に数千里を駆け、

その耳、三里先に落ちた針の音をも聞き分け、

闇夜に千メートル先の敵をも見極める眼を持ち、

その姿、動けば電光石火。とどまれば樹木の如し……

されど人知れず風のようにさすらい、風のように生きてきた

風の民であり、最強の忍びの一族である風魔一族の末裔であることを――……。

そして、彼が実は神に選ばれし、聖剣の戦士の一人であることを――……。

一人の”風”の戦士と幻想殺しが出会う時、物語は始まる！

第一話 学園都市に降り立つ”風”（後書き）

オリジナル部分の文章力の拙さが嫌でも目立つ……。そして、定期更新がお出来になる他の作家さんがどれだけすごいか骨身に染みました。

感想・評価、誤字・脱字ご指摘宜しくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1229y/>

とある戦士の風林火山

2011年11月4日15時23分発行